

ヨーロッパ言語文化

European Studies

当講座は、近代から今日に至るまでのヨーロッパに見られる多様な文化の形態を現代的な視点で研究しようとする学生、現代ヨーロッパの社会事象を探究したい学生を広く受け入れます。講座の学生の専門も、チャールズ・ディケンズ、エリザベス・ギヤスケル、トマス・ハーディ、ハインリヒ・フォークラー、ファニー・メンデルスゾーン = ヘンゼル、近代上海におけるメディア空間、フランスの移民子弟の教育、フランスにおける非婚化、イギリスにおける女性とミッションなど、様々な分野に及んでいます。必要なのは研究の強い動機と向学心です。その社会も文化も無限の陰影に富むヨーロッパからあなた自身の研究テーマを見つけ、それを追求することで、今の自分を変えるチャンスをつかんでみませんか？

【修了生の主な就職先・勤務先】

名古屋大学、早稲田大学、東京理科大学、豊橋技術科学大学、名城大学、松山大学、岐阜県立高校、ヤマハ英語教室、ギノージャパン、静岡新聞

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/tagen/europe/>

教員と専門領域・研究テーマ

松岡光治 教授

専門領域：19世紀イギリス文学、ヴィクトリア朝文化史

上原早苗 教授

専門領域：19世紀イギリス小説、ヴィクトリア朝文化研究

西川智之 教授

専門領域：ドイツ語圏の世紀転換期の文化・芸術

村主幸一 教授

専門領域：シェイクスピア、西洋演劇、パフォーマンス研究

鶴巻泉子 准教授

専門領域：ヨーロッパ地域研究、フランスのマイノリティ研究

◎在校生の声

ヨーロッパ言語文化講座の特徴は、学生に対するサポートが充実しているところだと思います。指導教員をはじめ、他の先生方からも異なった、新たな視点からの助言をいただける、自分でも贅沢だと思うくらいの良い環境です。授業はどれもメリハリがあり、時にワイワイ、時に真面目にと、受講生はみんなうまく切り替えて臨んでいます。

浅井里嘉子さん（博士前期課程2年）

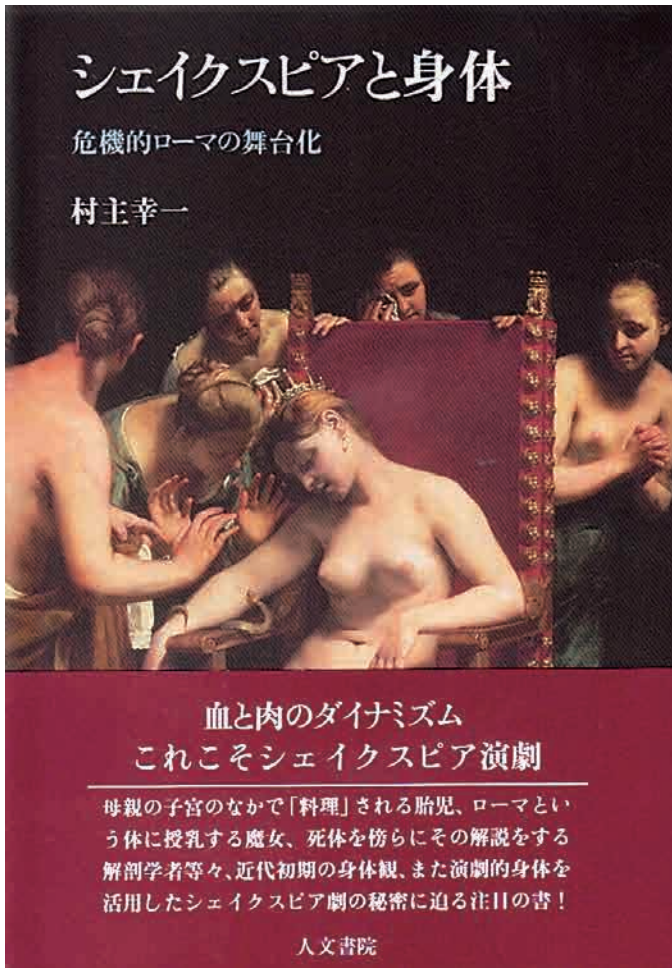


◎修了生からの一言

私は2007年4月に後期課程に入学し、2011年3月に「国際都市におけるメディアと近代性」の研究で博士号を取得しました。博士後期課程修了後国際言語文化研究科の助教として採用され、現在に至ります。ヨーロッパ言語文化講座在籍時、主に村主幸一先生の下でメディア／パフォーマンス研究について勉強しました。現在、科研費の分担で「戦時下の移動演劇」の研究に取り組んでいます。大学院の勉強を通して得た専門知識や研究手法は現在の研究につながっています。



国際ワークショップで発表する楊韜さん
(名古屋大学大学院助教)



(学生と先生との対話)

S: 先生の新刊書、読ませていただきました。

T: それは感激だ。あとがきしか読まない人も多いからね。それで感想は？

S: 『ハムレット』しか読んだことがない僕としては、古代ローマの歴史を題材にしたローマ史劇というのは、なんだか取っ付きにくいですね。

T: 主人公のハムレットは劇中、内省を繰返し、彼の動機探しに我々を向かわせる。そんなハムレットは自意識の強い近代人の原型のようにみえるだろう。その姿は、現代の観客も同一化しやすいわけだ。

S: ローマ史劇の登場人物との同一化はむずかしいですね。

T: そうだろう。劇の冒頭から極めて残酷だったりするからね。暴力を受ける者たちの傷や流血はほんじゃじゃない。

S: そのような暴力は、シェイクスピアが文明化の過程の早い段階に位置する作家だからでしょうか。

T: いや、それよりも演劇そのものが、登場人物や、それを演じる役者の身体性をクローズアップするからだと思うね。

S: 身体性といえば、先生の本を読んで、現代人には馴染みの薄い歴史的な身体観にも触れることができました。

T: それはなにより。テキストには歴史的な厚みというものがあ、そのような層を掘り下げると、また別の局面が浮かび上がってくるものなんだよ。

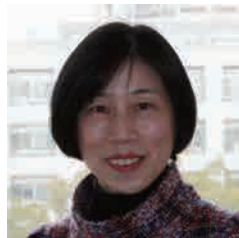
S: ギリシア・ローマの古典もキリスト教文化も、シェイクスピア劇の地層をなしているということが、先生の本からよくわかりました。

T: 「強い詩人」という概念があるんだが、それは文化の伝統を継承し、それと格闘することで、独自の作品を作り出すことができる人をいうんだよ。シェイクスピアもその一人だと言えるね。



松岡光治 教授

19世紀イギリス文学のテキストを主として心理的リアリズムの観点から分析しています。現在は、ヴィクトリア朝の都市文化における明と暗をイメージ化した言説、そして権力の実践に付随する屈折した心理が投影された言説について、歴史的・社会的コンテキストを踏まえて考察することに関心があります。授業では、小説の精読を通して英語読解力を養成しながら、細かい問題を深く掘り下げて論文作成に役立てる方法を教授しています。



上原早苗 教授

ヴィクトリア朝小説を主に研究しています。現在は、ヴィクトリア朝の出版制度・検閲制度というコンテキストに着目しながら、小説テキストを分析しています。検閲制度を考えるにあたり、文化研究の枠組みにも注目したいので、授業ではまず文化研究の方法論を検討し、それからテキストをじっくり読むようにしています。受講生はとても積極的に、質問も次々に出てくるので、毎回、教室に行くのが楽しみです。



西川智之 教授

研究の関係上、100年以上前の雑誌や新聞が資料として必要になりますが、デジタル化されてドイツやオーストリアの大学図書館などで公開されているものも多く、インターネットのありがたさをつくづく感じています。ただしそうした資料の分析には、丹念に読み込むという昔ながらの根気のいる精緻な作業が必要となります。学生には研究のそうした地道な面を伝えられたらと思っています。



村主幸一 教授

70年代末に述べられた「文学の領域でも明治以降の日本では(中略)小説の特権的位置が当たり前になっていて、詩や戯曲は非常に狭いところに押し込められてきた」(『劇的言語』)という言葉が今も当てはまる状況があると感じています。近代演劇の代表であるチェホフとイブセンの作品は文庫本で読めるものはわずか。この劣勢を跳ね返し、ドラマの特質と面白さを多くの人々に伝えたいと思っています。



鶴巻泉子 准教授

フランスの地域・移民問題をEU統合を背景にした国民国家の変容という観点から研究しています。最近ではスペインのカタルーニャ地域などとの比較も始めました。歴史的に独自の文化を有すると考えられてきた地域が、EU拡大が進み移民問題が深刻化する現在、国民国家との関係をどのように変容させているのか、領域性と所属の関係はどう変化するのか、フランス社会はマイノリティ問題をどう捉えなおしてしていくのか、に関心があります。